

## アメリカ中国研究見聞録 ハーバードにて

川尻文彦

### 1

私はこのたび幸運にも勤務先から1年間の在外研修の機会を与えられ、2003年9月から1年間、ボストン近郊(チャールズ川を挟んで向かい)の小都市ケンブリッジ市にあるハーバード大学(Harvard University)のジョン・キング・フェアバンク東アジア研究センター(J・K・Fairbank Center for East Asian Research)に客員研究員(visiting scholar)として滞在した。同じ時期、たまたま大阪大学中国文学の浅見洋二先生、金沢大学東洋史の古市大輔さんと一緒にすることになり(ともに燕京研究所所属)、いろいろと教わり、お世話になった。本稿の内容にもお二方から得たものが反映されている。

中国研究者としてサバティカル・イヤー(sabbatical year)をどこでどのように過ごすかについてはいろいろ考えもあるところと思われる。最近では準備その他に何かと手間がかかる海外に出ず日本の自分の研究室で勉強して過ごす、あるいは内地留学するという方もおられるようであるが、海外留学をするのが通例と思われる(少なくとも私の勤務先では原則として内地は認められていない)。その場合、中国や台湾で1~2年を過ごすというのであればインテンシブに資料調査に励むなり、中国人研究者との交流から最近の研究状況を肌で知ることができるなどのメリットがある。院生時代とは違って様々な面で視野が広がった今(私は院生時代の94年から95年にかけて一年間、中国留学を経験している)、そのような過ごし方をすることも有意義だと感じたが、私としては以前からアメリカにおける中国研究の状況に関心があったこと、30歳代前半~半ばとは言え外国語(英語)を含め異文化への適応力のある若いうちにアメリカに行っておきたいとのことから早くからアメリカ行きを決めていた。

フェアバンク Fairbank はアメリカの中国研究の開祖とも言うべき人で説明は不要と思われる。日本語に翻訳されたものとして、概説書として定評のある『中国』(上・下)(市古宙三訳、東京大学出版会、*The United States and China*, 1948)、『中国の歴史 古代から現代まで』(大谷敏夫・太田秀夫訳、ミネルヴァ書房、*China: A New History*, 1992)(これがフェアバンクの遺著になった)がある。少し古くなるが1960年代の時論を集めた『人民中国論』(衛藤瀆吉訳、読

売選書, *China: The People's Middle Kingdom and U.S.A*)がある。しかし, 専門家の間では中国外交史研究に新局面を開いたとされる *Trade and Diplomacy on the China Coast: The Opening of the Treaty Ports, 1842-1854*(Harvard University Press, 1953)等の著書で近代中国外交史家としてのフェアバンクの名は知られている。ハーバードおよびアメリカの中国研究の草創期についてはフェアバンクの自伝『中国回想録』(平野健一郎・蒲池典子訳, みすず書房, *CHINABOUND: A Fifty-year Memoir*, 1982)に詳しい。いずれにせよフェアバンクは思想史のベンジャミン・シュウォルツ教授(共産党史, 厳復, 古代思想史, 等)とともにアメリカにおける中国研究の一時代を築いた巨人であることは間違いない。

フェアバンクセンターは日本研究のライシャワー研究所 Reischauer Institute (現所長は, 明治時代の労働運動史のアンドリュー・ゴードン Andrew Gordon 教授。皇太子妃雅子妃殿下の Harvard College 時代の指導教官としても知られる), 韓国研究の Korean Institute, ロシア研究の Davis Center, アジアセンター Asia Center と同じ建物・同じフロアにある。もっともこれらのセンターは, 現在, ハーバードスクエア Harvard Square 駅からボストン市内方面に一駅行った(徒歩 15 分ほど)セントラルスクエア Central Square 駅にある建物に仮移転中であり, もともとのクーリッジホール Coolidge Hall (History department の裏手, 燕京図書館 Yanjing Library にも近い)に戻るにはいましばらくの時間がかかるようである。

ちなみにフェアバンクセンターの現所長はエリザベス・ペリー Elizabeth Perry 教授の後を継いで中国文学(俗文学, 敦煌変文, 等)のヴィルト・イデマ Wilt Idema 教授 (Department of East Asian Languages and Civilizations, 東アジア言語・文明学部, 通称 EALC, オランダ・ライデン大学から移ってこられた), 副所長 (Assistant Director) は中国近代史, 日中関係史のロナルド・スレスキ Ronald Suleski 博士であり, お二人とも日本への在任経験があり イデマ教授は北大, 京大人文研などに, スレスキ博士は東京在住, 十数年である, 日本語に堪能である。とくにスレスキ博士にはたいへんお世話になった。

フェアバンクの見解を Western Impact-Chinese Response 「西洋の衝撃・中国の反応」モデルにとらわれたものであると見なすなど, アメリカの中国研究を包括的に批判した著書『知の帝国主義 オリエンタリズムと中国像』(佐藤慎一訳, 平凡社)(原題 *Discovering History in China*, 1984)等で日本でも著名なポール・コーエン Paul Cohen 氏。同氏はもともとヒラリー・クリントン前大統領夫人の母校, そして最近では映画『モナリザ・スマイル』の舞台としても知られるボストン近郊の名門女子大ウェルズリー・カレッジ Wellesley College の教授であるが, 同カレッジ退職後は, フェアバンクセンターの所員 (associate, 研究室をもっている)でもあるので, 頻りに顔をあわせる機会があった(かなり緊張した)。ボストン大学など近郊の大学に籍をもつこのような所員は多数おり, 毎日のように開かれるシンポの企画, 司会, コメンテーターなどをつとめている。

フェアバンクセンターの所員には, 私の研究領域に近いところでいえば, フェアバンクの遺著となった *China: A New History* 『中国の歴史』の共著者, 中華人民共和国の知識人研究でも知られる Marele Goldman 教授 (ボストン大) は所内のリーダー的存在のように見

える（ご主人はロシア研究センターの重鎮）。それに英語圏では絶大な影響力を誇る毛沢東研究者の Stuart Schram 教授（ロンドン大 SOAS）も research associate であるようで（所内ではほとんど見かけない。もしかしたら名目だけかもしれない）、毛沢東生誕 110 周年を記念して 2003 年 12 月初旬に 3 日間にわたって大々的に開かれた Mao reevaluate（毛沢東再評価）シンポジウムは壮観であった。毛沢東の著作数十巻の英訳作業が Schram 教授を中心に鋭意進められており、英語圏における毛沢東研究の飛躍的発展が期待されている。またもと中国人民大学清史研究所研究員で戊戌变法史研究の孔祥吉氏もメンバーの一人である。

実際のところ、文学部出身、人文科学系の私からすれば、フェアバンクセンターの構成員はどちらかといえば社会科学系が多いような印象がある（1991 年夏から 93 年春先にかけて同じくフェアバンクセンターに滞在した坂元ひろ子氏の「アメリカの中国研究についての見聞記」『中国研究月報』545 号、1993 年 7 月も参照）。

このほかに、2003-04 year は 8 名のいわゆるポスドク（post doctoral fellow）と 14 名の客員研究員（visiting scholar）を受け入れていた。ポスドクについては、ハーバード以外で Ph.D を取得した者という条件がつくようで、アメリカの地方大学の assistant professor クラス（か、それ以下）が多く、多数の応募のなかから厳しい選考を通じて選ばれ、年 4 万ドル程度の報酬を得る代わりに、センターではシンポジウムの数度の企画と自らの発表が義務付けられているようである。tenure（テニユア、終身雇用資格）がまだなく、この一年で何とか業績（できれば本を一冊）を積み重ねて、job market に参入し、学界で生き残っていこうという人たち おおむね家族を抱え、30 歳代後半以上 なので非常にピリピリした感じである。彼らを見ていると、アメリカにおいても、自分の能力を売り込む能力も「実力」のうちということもよく分かるし、いわゆる有力教授へのさりげない「ゴマすり」もおそらく日本とは比べ物にならないほど必要不可欠のように見受けられ、率直に言って痛々しい感じが私にはした。

## 2

同センターの日本人の客員研究員は、今年は私のみで、ほかは中国大陆と台湾出身者が多数をしめる。毎週水曜日には、director's table といわれるサンドイッチをつまんで所員一同が情報交換を行う場が提供されていた。私は所員としてセンターの諸活動に積極的に参加するほかに、2003 年秋学期（fall term）は History Department（歴史学部）のフィリップ・キューン Philip Kuhn 教授とマーク・エリオット Mark Elliott 教授の seminar に参加することを許され、アメリカの中国研究の一端を垣間見ることができた。「走馬看花」はおるか「跑馬看花」であることは承知のうえである。それらを とくにエリオット教授のそれを中心に 私の感想を交えながら、若干ここで紹介したいと思う（末尾にエリオット教授のセミナーのシラバスを添付した）。

フィリップ・キューン Philip Kuhn 教授は、最近では『中国近世の靈魂泥棒』（谷井俊仁・

谷井陽子訳,平凡社,*Soulstealers: The Chinese Sorcery Scare of 1768*, 1990)の著者として知られる。*Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure, 1796 - 1864* (Harvard University Press, 1970)をひっさげて(上述のP・コーエン『知の帝国主義』では新たな中国史研究を代表するものとして絶賛されている),シカゴ大学から母校であるハーバードに移ってこられてから久しい。ハーバードの中国研究の重鎮であり,学生,同僚から多くの尊敬を集めている。最近著 *Origins of the Modern Chinese State*(Stanford University Press, 2002)は清代経世思想と毛沢東にいたる近現代思想との連続性を扱ったものである。セミナーはアメリカにおける中国研究の歴史,トピックをいくつかの重要な著作を手がかりにたどるオーソドックスなものであった。威厳と余裕あふれる雰囲気印象的であった。

マーク・エリオット Mark Elliott 教授は,カリフォルニア大学サンタバーバラ校から移ってこられたばかりの新進気鋭である。「清朝史」を専攻(エリオット教授は,つねづね満州語史料を用い主に清朝初期を扱う「清朝史」と満州語史料を用いず伝統的な主に社会経済史的手法で清史を研究する「清代史」の両者の断絶を解消すべきであると主張している)。40歳代半ば。話題作 *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*(Stanford University Press, 2001)の著者である。日本にも数年前,留学経験があり,日本通である。エリオット教授の日本語による論著は私の知る限り「清代満洲人のアイデンティティと満洲人の中国における統治」『満族史研究通信』第10号,2001年4月,「康熙・雍正朝の満文硃批奏摺に関する覚え書き」『満族史研究通信』第9号,2000年4月,「中国第一歴史档案馆所蔵内閣・宮中生満文档案概述」『東方学』第85号,平成5年1月,等がある。とくに最初の「清代満洲人のアイデンティティと満洲人の中国における統治」はエリオット教授の研究視角のエッセンスを知るのにすこぶる役に立つ。

日本人学者の訪米,滞在は現在では珍しいものではないが,状況紹介めいた文章でも存外少なく,以前イェールとプリンストンに滞在され,ジョナサン・スペンス教授や余英時教授のセミナーを受講された河田悌一氏のもの(『中国近代思想と現代 知的状況を考える』1987年,『中国を見つめて』1998年,いずれも研文出版)を除いて見かけないので,私のこの拙文も何らかの意義があるのではと考えた次第である(アメリカにおける中国近代史・近代思想史研究状況の紹介については,佐藤慎一「アメリカにおける中国研究」『近代中国研究案内』岩波書店,1993年)。

アメリカでの seminar は一次資料の原典講読を中心とする日本の大学院での「演習」とは異なることはある程度知られているのではないかと思う。出席する学生はG1,G2と言われる大学院(博士課程)の1年生,2年生が主である。彼らは授業の単位をとった後,general examination といわれる Ph.D candidate (Ph.D 候補者)になるための試験をパスしなければならない。その後で,3,4年目には海外に資料収集のために留学したり,資料の読み込みをするなりして,5年目(かそれ以降)くらいに博士論文を完成させるのが一般的らしい。学部時代と大学院時代とでは専攻が同じことが大多数の日本とは異なり,学部時代とはまったくことなる分野の研究にチャレンジすることも珍しくない

こちらの大学院生にとっては、G1、G2 では専攻領域の基礎的な知識の習得に追われる時期であろうと思われる（general examination にパスするのが彼らの最大の関心事である）。王朝名や皇帝名などの基礎的な中国史の知識にすら事欠く場面もまみられ、この段階では研究者としてひとり立ちしつつある日本の博士課程の院生に比べ見劣りするの否めないように思われる（ただこちらの院生は問題関心の斬新さ、自分のかかえているテーマのオリジナリティーを他人に説得的に語る能力に長けている）。

修士課程の学生であればなおさらそうである。ハーバードにも通称 RSEA(Regional Studies of East Asia) という修士課程のみのプログラムがあるが、定員も非常に多く、学部時代の専攻も多様で（中国・台湾系の留学生には本国で学部時代、英文学・英語専攻だったという人が多く、はじめから英語が堪能な人が多いような印象がある（英語の下手な私は圧倒された））、まさしく初歩の初歩から東アジアのことを勉強しはじめるといったおもむきである。同課程修了後はそのままビジネスの世界に入るか、研究者を目指すのであれば、あらためて EALC や History Department 等の Ph.D program に入りなおすことになる。もっともこの種のことはアメリカの大学院を修了した元留学生の方に聞くほうが正確な情報を得ることができるのではと思う（中国専攻ではないが、吉原真里『アメリカの大学院で成功する方法』中公新書、2004年）。

seminar の進め方は担当教官によって多少の違いはあるが、どこの大学院でも大差なく、おおむね assignment といわれる大量の secondary（二次文献）の課題図書、論文が学期のはじめに指定され、それを読んで来ていることを前提に議論が進められる。また毎回、課題図書、論文の内容を報告するレポーターが指名される。assignment の abstract（要約）の提出が求められることもある。後ろに添付したように assignment の分量は non-native にとってはとうてい読解不可能な多さである（事前にコピーをするだけでもたいへんな労力で、要領の悪い私などはそれだけで一週間がつぶれてしまう）。よほどの英語力の持ち主でない限り、はっきり言って授業についていけない（ただしアメリカのやりかたに慣れれば、授業についているふりをするだけには可能のように思われる）。

もっとも assignment の分量は native にとっても少なくないもので、もともと精読をもとめられておらず、skim（スキム、速読）といわれる大雑把に内容と問題点をつかむことが求められているようだ。多くのまじめな院生は自分の関心に従って読んできて、発言する内容をノートに簡単にメモしてくるなどしていた。また学期末には授業での議論をふまえたうえで日本で言う「研究ノート」ていどのレポートを課される。これもたいへんな負担である。「secondary なものばかり読んであてずっぽうの議論をしても……」と思う人がいるかもしれないが、半年の学期（fall term と spring term）（各 12 回、日本に比べても短い）が終わる頃には自分の扱う時代の研究状況、研究蓄積が自然と把握できるようになっている点で（英語がすらすら読めるならば、という条件がつくが）、アメリカ的な合理主義を感じ取ることができる。研究蓄積をまったく無視したような研究が横行しているように思える日本の状況と比較して特にその感を強くする。

単位を必要とせず、assignment をこなす余裕はないが、授業の内容だけを覗きたいとい

う学生のために、audit（聴講）あるいは sitting（座聴？）という習慣もあるようである（ハーバードだけかもしれない）。はじめは事情がわからず不思議に思っていたのだが、教室の隅に椅子を置いて静かに聴講している学生を数人見かける。あくまでも「聴講」であって、議論に参加したりせず、発言は控えるというのが礼儀のようである。

ただし問題点もなくはないように思われる。discussion にしても研究を始めたばかりの院生たちであるから、例えば一次文献をまったく踏まえず、専門知識もないまま、遼、金、元、清の征服王朝としての性格の比較を論じたりするわけである。混乱しがちな学生の議論をうまく導き、結論にまでもっていく教官の見事な手綱さばきに「教育者」の端くれとして感心することが多々あったことは事実である（溝口雄三「UCLA 交学記」『中国 社会と文化』第8号、1993年6月、はアメリカの大学院で教鞭をとった体験談で、教員の立場からの興味深いエピソードが盛り込まれている）。さすが discussion 文化のアメリカである。しかしそのような史料にもとづかない「空論」を延々と繰り返しても果たして得るものがあるのか、私としては心配になってしまう。また考えがまとまる前に発言してしまうとか、単なる語句の質問も堂々としてしまう場面もまま見受けられる。

そもそも多くの日本人は英語での早口の議論になかなかついていけず、shy（内気）で moderate（控えめ）で polite（礼儀正しい→もちろんプラスの意味で使われていない）で class participation（授業にのぞむ姿勢）が良くないと見なされがちでいい成績評価がもらえないという傾向にあるようだ。

しかし、ハーバードの状況を見る限り、思ったほど院生の自己主張は激しくないように見える。他人を遮ってまで発言をしようとするのは少ないし、自己アピールのためだけに発言するというようなこともあまり見られないように思われる。一説にはハーバードの学生は「お坊っちゃん」「お嬢さん」が多く、おとなりの MIT（マサチューセッツ工科大学）にくらべ他人を蹴落としてまで、というような競争心に欠ける傾向があると聞いたことがある。

### 3

エリオット教授のセミナーで話題になったトピックとして、漢化（sinicization）をめぐる議論がある。周知のとおり、近年のアメリカの中国研究をめぐって最もホットな論争はエヴリン・ロウスキ（Evelyn Rawski）と何炳棣（Ho Pingti）の間で行われた sinicization をめぐる論争であると思われる。ことの発端は『ジャーナル・オブ・エイジアンスタディーズ』に載ったロウスキの「清再評価 中国史における清代の意義」（1996年）（Evelyn Rawski, "Reenvisioning the Qing :The significance of the Qing Period in Chinese History," *Journal of Asian Studies* 55.4 (Nov1996),829-850）と題する論文である。この論文の冒頭で同じく『ジャーナル・オブ・エイジアンスタディーズ』の30年近く前の何炳棣の論文「中国史における清代史の意義」（1967年）（Ping-ti Ho, "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History," *Journal of Asian*

*Studies* 26.2(Feb1967), 189-195) を批判したのである。同論文は、もともと 1966 年に The Association for Asian Studies の年次大会でひらかれた *New Views of Ch'ing History* と題したシンポジウムの講演のひとつである。同シンポは K. C. Liu 劉広京が組織したもので、急速に発展しつつあったアメリカにおける中国学の現状を鑑み、新たな研究潮流に着目しつつ、清史研究の重要性をあらためて喚起するものである。

何炳棣の同論文で清代は前近代と近現代をつなぐ重要な時期であるとし、その理由として 1.領域、2.人口、3.組織だった漢化 (systematic sinicization) によって最も成功した征服王朝、4.政治・経済・社会の発展、5.物質文化・芸術、の 5 つの側面を挙げる。総じて清史研究の意義を簡潔に概論的に説明した小論である。いわゆる実証論文ではない。

これに対し、ロウスキは、「清再評価 中国史における清代の意義」のなかで、何炳棣のとくに第 3 の「組織だった漢化」(systematic sinicization) を取りあげて批判を加える。ロウスキは「漢化」といっても 20 世紀の漢族ナショナリストが中国の過去をそのように解釈したというのに過ぎず、歴史的事実とは言えないという (p.842)。ロウスキの見解の底流にあるのは、Manchu-centered approach (満州中心史観) とも言うべきものである。満州語の資料を重視することによって、(これまで主に依拠していた) 漢文資料からはうかがい知ることのできない清代の真の側面を解明できるというのである。その嚆矢となったのが、著名なパートレット Beatrice Bartlett の軍機処の研究 (*Monarchs and Ministers: The Grand Council in Mid-Ch'ing China, 1723-1820*, 1991) であり、ロウスキもこれを高く評価している。そのうえで近年の研究成果に言及しながら、清の多民族性、征服王朝としての性格、満州人皇帝による支配体制の特色、ナショナリズム成立のこみいった事情を指摘する。

その後、何炳棣は「Sinicization を擁護する エヴィリン・ロウスキの「清再評価」への反論」(1998 年) Ping-ti Ho, "In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's 'Reenvisioning the Qing'", *Journal of Asian Studies* 57.1(Feb 1998), 123-155) で、ロウスキ論文は二次文献の寄せ集め (only a collection of 'secondary literature') であり、単一のテーマによる文献探索 ('monothematic bibliographical survey') に過ぎないと批判し (p.126)、また Beatrice Bartlett の軍機処の研究において満州文献の使用は我々が想像するほど多くはなく(この研究そのものはいかなる言語で書かれたものでもこの水準を凌駕するものはないと高く評価するが)、新しい歴史解釈をするうえにおいて満州語文献が果たす役割についても疑問符をつけている。要するには満州語をつかわなければ見えてこない史実がほんとうにあるのかどうかである、という。

またロウスキの批判を受けて sinicization を「漢化」ではなく「華化」であると若干修正を行い、マクロ史的視角から「中国文明の揺りかご」(cradle of Chinese civilization) の比喩で sinicization をあらためて説明した。

私のみるところ両者の論争は噛み合っていないが、アメリカの学界の大勢はロウスキの立場を支持するもののようである。例えば、ポール・コーエン氏はご自身の提唱する「中国中心史観」(China-centered approach) が十分にカバーしきれない領域(ここでは非漢人コミュニティ、異民族支配の研究、等)を開拓する新しい方法論であるとして評価する (Paul Cohen,

Introduction, “*China Unbound: Evolving perspectives on the Chinese Past*” Routledge Curzon, 2003, p.9.  
同書名はフェアバンクの *Chinabound* 『中国回想録』を意識したものであろう。

やはり問題は漢語か満州語かのどの言語の文献を重視するかということよりも、いかに説得的な歴史を描くことができるかにかかっているといえるだろう。

何炳棣に対するロウスキの再反論論文は発表されていないが、1998年に発表された著作 Rawski “*Last Emperors: A Social History of the Qing Imperial Institutions*”が事実上の反論と見てよい。さてロウスキの試みは成功しているのでしょうか？（私の周辺では分量が多いだけで、退屈な書物との声もあったが……）

ここ数年はからずも清代史を「漢化」の過程としてみることに反対の立場からの著作が次々とあらわれた。それは、

Pamela K. Crossley, 1999, *A Translucent Mirror: History and Identity in Qing Imperial Ideology*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Mark C. Elliott, 2001. *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China*. Stanford: Stanford University Press.

Evelyn Rawski, 1998. *The Last Emperors: A Social History of the Qing Imperial Institutions*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Edward Rhoads, 2000. *Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928*. Seattle: University of Washington Press.

の4冊である。それぞれ扱うテーマも若干異なり、特色あるものである。

*A Translucent Mirror* はなかなか読みづらい本であるが、乾隆帝時期を扱い、徐々に中央集権化されていく皇帝権力、支配の構造、イデオロギー、文化的な identity 等（これらが、19世紀以降のナショナリズムを準備したと考える）を相互にからめて論じる。

*The Manchu Way* は八旗の組織を女真族の入関にさかのぼって制度史的に検証した著作であると同時に、八旗をめぐる社会、風俗、生活、言語等を Manchu identity に注目しながら論じている。広く清朝の支配、歴史を新たな視角から書きなおしを試みる著作といえよう。論理明晰、簡潔な英文で読みやすい好著である。

*The Last Emperors* は、清朝宮廷の組織、習俗、女性、儀礼、信仰等について満州人としての独特な側面を中心に詳細に追ったものである。何でも書いており、事典的な性格ももちあわせている。

*Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928* は私の専門領域にもっとも近いものだが、従来あまり触れられることのおおくなかった清末・新政時期から辛亥革命、民国初期にいたる時期の満漢問題を思想史、社会史の両面から追ったものである。

『四庫全書』の研究で知られるワシントン大学のケント・ガイ Kent Guy 教授は、これらは後に「満州研究の四部作」(the Four Books of Manchu studies) と呼ばれることになるであろうとまで言っている (Who Were the Manchus? A Review Essay, *The Journal of Asian Studies* 61(Feb



2002), p.152 )。

私思うに、同じく清代を扱いながらも、思想史を扱うジョセフ・レブンソンの不朽の名著 Joseph Levenson, *Confucian China and Its Modern Fate*, 1965 やメアリー・ライトの同治中興研究 Mary Right, *The Last Stand of Conservatism: The T'ung-Chih Restriction 1862-1874*, 1962 (ともにアメリカの中国研究を代表する著作である) で見逃されていた側面に焦点を当てたもので、新たな研究視角を提示したものと見なせる。ただ「満州中心史観」が逆に「北京中心史観」「宮廷中心史観」に陥っているのではないかとの危険性があるようにもみえる。

とはいえこの4冊の著書、通読するだけでも大変である。英語力以外にも確かな学力が必要なことは間違いない。

比較的類似するテーマを扱うエリオット教授とクロッサリー教授の両者の間で論争が続けられているようであるが、両者の違いは、エリオット教授は満州人の征服以前から満州 identity は存在しそれが清末まで不変であった(エリオット教授のいう Manchu Way) とおおむね考えているのに対し、クロッサリー教授は乾隆帝あたりから満州人をめぐる情勢の変化に応じて変容していったと考えているようである(古市氏のご教示)。

エリオット教授のセミナーを受けた印象では、日本の研究に対する評価は思ったほど低くなく、日本の研究成果を積極的に取り入れようとする姿勢が旺盛である。謙遜が美德ではない(謙遜という概念がない、というより謙遜は悪徳に近い)この国で、日本の中国研究への賛辞は額面どおり受け取ってもいいように思われる。

一時期アメリカで流行した「市民社会」論はいささか上滑りな「流行」に終わってしまったとの観が否めないように思われるが(キューン教授による冷静な総括論文がある。フィリップ・A・キューン「市民社会と国制発展」『近きに在りて』第43号, 2003年8月), この「満州研究四部作」は、エリオット教授の研究に代表されるように実証面でも非常に着実であり信頼するに値する、息の長い価値を有するものであると予想される。日本人の得意とする「実証史学」について共通の土俵が日・米間に存在するようにみえる。日本人研究者としても彼らの提示する議論に食らいついて、学問的な対話する姿勢が必要なのではないかと強く感じる。

#### 4

アメリカでの生活を通じて感心させられたのは、アメリカ人の若手院生たちのプレゼンテーションの見事さである。子供のころから訓練されていることが容易にうかがいしれた。とりわけ導入の部分には、なぜ自分がこのテーマに取り組むのか、自分の研究の独自性はどこにあるのか等をアピールし人々をひきつける工夫がされていたように思われる。

著書や論文は「消耗品」であり、とにかく生産が義務づけられている(Publish or perish)。斬新なアイデア、既存の観念をひっくり返す果敢さにハッとさせられることも多い(空振りも多い)。英語という道具を使いさえすれば、誰もが参入できる舞台、まさしく激しい競

争社会（キューン教授の後任選びの場面で、候補の三名の著名教授の公開授業、一種の公開面接を目の当たりにして痛感した）、アカデミックな世界だけではなくすべての分野にわたるアメリカの活力の源泉を見たような気がする。

私が見たのは文字通り氷山の一角にすぎないであろうが、日本人と同じく「外国史」研究として中国に取り組む際のユニークな視角は中国人学者にはないもので啓発されることが多々あった。

細かい異文化ショックは数えきれないほどあった。渡米当初、自分をファーストネームで呼ばれ戸惑った。アメリカ東海岸は生活のしづらいところで、ニューイングランド地方の冬の厳しい気候、高カロリーのアメリカ食、高い物価等には閉口したが、一年を通じ日本人中国研究者としての自分のアイデンティティ等を含め、いろいろ考えさせられることが多かった。今後に生かしていきたい。

（かわじり ふみひこ・帝塚山学院大学）

## **Fall 2003 CHINESE HISTORY 252 CONQUEST DYNASTIES: THE QING EMPIRE**

Wednesdays, 2-5 pm

Prof. Mark Elliott

Seminar Room, 9 Kirkland Place

### **Overview**

The aim of this course is to provide in-depth study of the so-called “dynasties of conquest” (Liao, Jin, Yuan, Qing) that have ruled in China for much of the last millennium. In any given year, the focus of the seminar will be on only one dynasty, to allow for detailed and careful exploration of a range of issues pertinent to that regime. But by paying attention to larger issues confronted by all of these regimes (e.g., ethnicity, institution-building, intellectual accommodation, political compromise, gender, colonialism, representation), we will also be drawn to make comparisons with other regimes of conquest. Another goal of the course is to see how the study of “empire” in China can be integrated with the study of other imperial histories elsewhere in the world. For Fall 2003, the seminar will focus on the Qing, 1636-1912.

### **Prerequisites**

The course is intended for graduate students, primarily in EALC, HEAL, History, and IAAS. It is expected that students should have prior coursework in Chinese history; some background knowledge of Inner Asian history is also recommended. Readings will be primarily in English, with supplemental readings in Chinese and Japanese.

### **Course structure and requirements**

**Meetings.** Class meetings are three hours in length, to be held once a week. Participation in discussion is vital to the success of the seminar, and doing the reading is vital to participation in discussion. You should prepare for class with these two simple things in mind. Each student will be given the opportunity to seed and lead discussion by preparing a list of questions/issues related to that week’s readings. We will decide assignments at the first meeting. Questions for discussion should be distributed in advance by e-mail, preferably no later than midnight Tuesday. There is no meeting the Wednesday before Thanksgiving. Instead, there will be a special, informal meeting after the last class (time to be arranged) at which students will present preliminary versions of their comparative projects (see below).

**Written assignments.** Because this is primarily a reading seminar, not a research seminar, no research paper based on the use of primary sources is required. Rather, each of you is asked every other week to submit an abstract of any item included in that week’s reading. Abstracts must not be longer than 2 pages, double-spaced. In addition, you are asked to turn in a longer final paper comparing some aspect or phenomenon of Qing imperial history to the same or similar aspect or phenomenon in another imperial history outside China (for example, the problem of declining martiality in the Qing and in the Tokugawa, Qing policy toward non-Han minorities and US policy toward Native Americans, or frontier expansion in the Qing and Romanov empires). This paper should be limited to 25-30 pages and will be due Monday 26 January 2004. A preliminary presentation of the paper, explaining the question to be examined, shall be scheduled during a special additional meeting at the very end of the semester, the date of which will be set later.

**Evaluation.** Grades will be determined as follows: abstracts, 25%; weekly participation, 25%; final paper, 50%.

### **Readings**

The following books have been ordered and are available for purchase at the Harvard Coop.

James A. Millward, *Beyond the Pass: Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Xinjiang, 1759-1864* (Stanford University Press, 1998)

Mark C. Elliott, *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China* (Stanford University Press, 2001)

Pamela Crossley, *A Translucent Mirror: History and Identity in Qing Imperial Ideology* (University of California Press, 1999)

Evelyn Rawski, *The Last Emperors: A Social History of Qing Institutions* (University of California Press, 1998)

Patricia Berger, *Empire of Emptiness: Buddhist Art and Political Authority in Qing China* (University of Hawaii Press, 2003)

Gilles Deleuze and Felix Guattari, *Nomadology: The War Machine* (New York: Semiotexte, 1986)

Other assigned reading will be available through the Harvard-Yenching Library, in both electronic and regular reserve formats. Use of e-reserves is restricted to students officially enrolled in the course. Access may be made via the course web page (<http://www.courses.fas.harvard.edu/~chst252>) or via the library’s own site (<http://ereserves.harvard.edu/fall.html>).

## **Schedule**

### **Week 1 17 September Introduction**

Review: Joseph F. Fletcher, "Ch'ing Inner Asia, c. 1800," and "The Heyday of the Ch'ing Order in Mongolia, Sinkiang, and Tibet," both in John K. Fairbank, ed., *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 1 (Cambridge, 1978), 35-106 and 351-408.

Gertraude Roth-Li, "State Building Before 1644," in Willard J. Peterson, ed., *The Cambridge History of China*, vol.9, part 1 (Cambridge, 2002), 9-72.

### **Week 2 24 September Alien Rule and Accommodation**

Denis F. Twitchett and Herbert Franke, "Introduction," in Twitchett and Franke, eds., *The Cambridge History of China*, vol. 6 (Cambridge, 1996), 1-42.

Karl Wittfogel and Feng Chia-sheng, to *History of Chinese Society: Liao* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1949), 1-35 ("Introduction").

Gilles Deleuze and Felix Guattari, *Nomadology* (also found in *A Thousand Plateaus*)

Mark Elliott, *The Manchu Way*, 1-35 ("Introduction").

Herbert Franke, "The Role of the State as a Structural Element in Polyethnic Societies," in Stuart Schram, ed., *Foundations and Limits of State Power in China* (Hong Kong: CUHK, 1987), 87-112.

### **Week 3 1 October Notions of Empire**

Ronald Suny and Terry Martin, "The Empire Strikes Out: Imperial Russia, "National" Identity, and Theories of Empire," in Ronald Suny and Terry Martin, eds., *A State of Nations: Empire and Nation-Making in the Age of Lenin and Stalin* (New York: Oxford University Press)

Anthony Pagden, *Lords of All the World: Ideologies of Empire in Spain, Britain, and France* (New Haven: Yale University Press, 1995) (selections)

Herbert Franke, "From Tribal Chieftain to Universal Emperor and God: The Legitimation of the Yuan Dynasty," in Franke, *China under Mongol Rule* (Variorum, 1994), 7-84.

Fatma Gocek, "The Social Construction of an Empire: The Ottoman State under Suleiman the Magnificent," in Halil Inalcik and Cemal Kafadar, eds., *Suleiman II and His Time*, 93-108.

### **Week 4 8 October Alien Rule and Institution-Building**

Toa kenkyujo, ed., *Iminzoku no Shina tochi shi*, "Shin no Shina tochi," 285-301.

Mark Elliott, *The Manchu Way*, chapters 1-3.

Chang Te-ch'ang, "The Economic Role of the Imperial Household in the Ch'ing Dynasty," *JAS* 31.2 (February 1972), 243-273.

Qi Meiqin, *Qingdai neiwufu* (Beijing: Zhongguo Renmin daxue cbs, 1998) (selections).

Evelyn Rawski, *The Last Emperors*, pp. (chapters 1-3, 5)

Ishibashi Takao, "Shincho kokkaron," *To Ajia Tonan Ajia dento shakai no keisei* (Tokyo: Iwanami shoten, 1998), 173-192.

### **Week 5 15 October History and Identity**

Pamela Kyle Crossley, "Manzhou yuanliu kao and the Formalization of the Manchu Heritage," *Journal of Asian Studies* 46.4 (November 1987), 761-790.

Pamela Crossley, *A Translucent Mirror Qing Shizong* (Yongzheng emperor), *Dayi juemi lu* (selections)

### **Week 6 22 October Ethnicity and Acculturation**

Edward J. Rhoads, "Conclusion," in *Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China* (Washington, 2000), 285-295.

Mark C. Elliott, *The Manchu Way*, chapters 4-8.

Jack David Eller, "Ethnicity, Culture, and 'the Past,'" in Eller, *From Culture to Ethnicity to Conflict* (Michigan, 1999), 7-48.

Pamela Crossley, "Manchu Education," in Benjamin Elman and Alexander Woodside, eds., *Education and Society in Late Imperial China* (Berkeley: University of California Press, 1994), 340-378.

### **Week 7 29 October Conquest and the Frontier**

Peter C. Perdue, "Military Mobilization in 17th and 18th-century China, Russia, and Mongolia," *Modern Asian Studies* 30.4 (October 1996), 757-793.

Peter C. Perdue, "Boundaries, Maps, and Movement: Chinese, Russian, and Mongolian Empires in Early Modern Central Eurasia," *The International History Review* 20.2 (June 1998), 263-286.

James A. Millward, "Coming Onto the Map: "Western Regions" Geography and Cartographic Nomenclature in the Making of Chinese Empire in Xinjiang," *Late Imperial China* 20.2 (December 1999), 61-98.

Michael Khodarkovsky, "From Frontier to Empire: The Concept of the Frontier in Russia, Sixteenth-Eighteenth Centuries," *Russian History* 19.1-4 (1992), 115-128.

Ma Dazheng and Liu Di, *Ershi shiji de Zhongguo bianjiang yanjiu* (Harbin:Heilongjiang jiaoyu cbs, 1998), 1-65(introduction).

#### **Week 8 5 November Colonialism**

James A. Millward, *Beyond the Pass* Nicola Di Cosmo, "Qing Colonial Administration in Inner Asia," *International History Review* 20.2 (June 1998),287-309.

Kataoka Kazutada, *Shincho Shinkyō tochi kenkyū* (Tokyo: Hiroyamakaku, 1991)(selections)

Laura Hostetler, *Qing Colonial Enterprise: Ethnography and Cartography in Early Modern China* (Chicago, 2002),101-125 (chapter 4, "Bringing Guizhou into the Empire").

#### **Week 9 12 November Gender**

Dorothy Ko, "The Body As Attire: The Shifting Meanings of Footbinding in Seventeenth-Century China," *Journal of Women's History* 8.4 (Winter 1997), 8-27.

Evelyn Rawski, *The Last Emperors*, Chapter 4.

Mark Elliott, "Manchu Widows and Ethnicity in Qing China," *Comparative Studies in Society and History* 41.1(January 1999), 33-71.

Wu Hung, "Emperor's Choice," chapter 4 of *The Double Screen: Medium and Representation in Chinese Painting*(Chicago: University of Chicago Press, 1996), 200-236.

Ann Stoler, "Sexual Affronts and Racial Frontiers," in Frederick Cooper and Ann Stoler, eds., *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World* (Berkeley: University of California Press, 1997).

Wai-ye Li, "Heroic Transformations: Women and National Trauma in Early Qing Literature," *HJAS* 59.2(December 1999), 363-443.

Ding Yizhuang, *Manzu de funu shenghuo yu hunyin zhidu yanjiu* (Beijing, 1999)

#### **Week 10 19 November Religion, Ritual, and Politics**

Samuel M. Grupper, "The Manchu Imperial Cult of the Early Ch'ing Dynasty," Ph.D. dissertation, Indiana University (1979), 136-146.

Elliot Sperling, "Awe and Submission: A Tibetan Aristocrat at the Court of Qianlong," *The International History Review* 20.2 (June 1998), 325-335.

Evelyn Rawski, *The Last Emperors*, 197-294 (chapters 6, 7, and 8)

Nicola di Cosmo, "Manchu Shamanic Ceremonies at the Qing Court," in Joseph McDermott, ed., *State and Court Ritual in China* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 352-398.

James Hevia, "Lamas, Emperors, and Rituals: Political Implication in Qing Imperial Ceremonies," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 16.2 (1993), 243-278.

"Inscriptions from the Yonghe gong," excerpts from Ferdinand D. Lessing, *Yung-ho-kung: An Iconography of the Lamaist Cathedral in Peking with Notes on Lamaist Mythology and Cult* (Stockholm, 1942), 9-13, 57-62

#### **Week 11 26 November no class meeting**

#### **Week 12 3 December Emperorship and Representation**

Patricia Berger, *Empire of Emptiness*

David Farquhar, "Emperor as Bodhisattva in the Governance of the Qing Empire," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 38 (1978), 5-34.

Wu Hung, "Emperor's Masquerade: 'Costume Portraits' of Yongzheng and Qianlong," *Orientalia* 26.7(July/August 1995), 25-41.

#### **Week 13 10 December The Qing and Modern China**

Ping-ti Ho, "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History,"*Journal of Asian Studies* 26.2 (February1967), 189-195.

Evelyn Rawski, "Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History," *Journal of Asian Studies* 55.4 (November 1996), 829-850.

Ping-ti Ho, "In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's 'Reenvisioning the Qing'," *Journal of Asian Studies* 57.1 (February 1998), 123-155.

Zhang Binglin, "Explaining 'The Republic of China'," trans. Par Cassel, *Stockholm Journal of East Asian Studies* 8(1997), 15-40.

Karen Barkey and Mark von Hagen, eds., *After Empire: Multinational Societies and Nation-Building* (Boulder:Westview Press, 1997) (selections)

Final presentations on date TBA

l papers due 26 January 2004 (Monday)